

5.

国際研究ネットワーク

2018 年度

国際研究ネットワーク構築概要

- 1) 海外研究交流
- 2) 国際共同研究プロジェクト
- 3) JAWS・AIT
- 4) 海外研究者フェローシップ受入
- 5) 国内外招聘研究者一覧

▶ 2018 年度国際研究ネットワーク構築概要

12 カ国の研究機関・研究者との国際研究・交流ネットワーク

ジェンダー研究所は日本におけるジェンダー研究の中核的な役割を担いながら、国内・海外の研究機関及び研究者らと広くネットワークを構築してきた。定期的に海外から優れた研究者を招聘するほか、海外からの若手研究者の受入れと日本からの派遣、国際共同研究に積極的に取り組んでいる。2018 年もアジア、ヨーロッパ、アメリカの研究者らと交流を進めて具体的な成果を出した。ジェンダー研究所が拠点として進めてきた日本ーアメリカ女性政治学者の交流（JAWS）プログラムが、2018 年はアメリカ政治学会の支援を得てボストンで開催された。今年は日米の若手研究者の交流やコーチングに重点を置いた。また、ノルウェー科学技術大学のジェンダー研究センターとは共同研究に向けた研究助成金に申請し、採択される成果を挙げた。

ジェンダー研究所を拠点とする国際ジェンダー研究ネットワークイメージ



ヨーロッパ	アジア・オセアニア	日本国内	北米
ノルウェー : ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター フランス : パリ第2パンテオン・アサス大学 イギリス : ロンドン大学 《特別招聘教授》 スイス : Delphine Gardey (ジュネーブ大学) 招聘研究者 5 名 (115 頁参照)	台湾 : 国立台湾大学/台湾国立政治大学 韓国 : 釜山大学/韓国ジェンダー政治研究所/韓国女性開発研究所/大韓民国近代歴史博物館/韓国ジェンダー政治研究所/ソウル大学日本研究所/ソウル大学国際問題研究所/「East Asian International Relations Theory」研究会 タイ : アジア工科大学院大学 (AIT) フィリピン : フィリピン大学ディリマン校/ Scalabrini Migration Center インドネシア : スラバヤ大学/Migrant CARE /インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター インド : インド工科大学 オーストラリア : モナシュ大学/スウィンバーン工科大学 招聘研究者 4 名 (115 頁参照)	政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (Gender, Diversity and Representation (GDRRep)) 日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会 国際移動とジェンダー研究会 現代規範理論研究会 Transnational Commercial Surrogacy and the (Un)Making of Kin 研究会 招聘研究者 18 名 (116 頁参照)	米国 : 日本ーアメリカ女性政治学者シンポジウム (Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS) / American Political Science Association / ワシントンカレッジ/アメリカ大学/ブリッジポート大学/ドライク大学/シモンズ大学 《受け入れフェロー》 米国 : Maura Stephens (ハワイ大学) 《特別招聘教授》 米国 : Jan Bardsley (ノースカロライナ大学チャペルヒル校) 招聘研究者 7 名 (115 頁参照)

1) 海外研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2018 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

黄長玲 (Chang-Ling Huang) (国立台湾大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施。(本報告書 18 頁参照)

楊婉瑩 (Wan-Ying Yang) (台湾国立政治大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施。(本報告書 18 頁参照)

Ah-ran Hwang (釜山大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。(本報告書 20 頁参照)

Jinock Lee (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。(本報告書 20 頁参照)

Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。(本報告書 20 頁参照)

Chia-Ling Wu (国立台湾大学准教授)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【研究交流の概要】

2015 年にはじまった台湾の不妊治療支援事業と日本の最新の不妊治療支援事業の内容について、情報交換。(本報告書 25 頁参照)

Jung-Ok Ha (大韓民国近代歴史博物館)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【研究交流の概要】

韓国で 2006 年から開始されている不妊治療支援事業と日本の最新の不妊治療支援事業の内容について、情報交換。(本報告書 25 頁参照)

Yoon Jiso（韓国女性開発研究所研究員）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【共同研究・研究交流の概要】

韓国女性開発研究所は韓国政府の総理府管轄のシンクタンク（1983 年設立）。女性や家族の問題について包括的な研究を進め、女性の政治参加や福祉の促進に貢献している。所属のジソ・ユン研究員と日韓の人口政策としての不妊治療費支援についてリプロダクティブライツの視点から共同研究。（本報告書 25 頁参照）

Anindita Majumdar（インド工科大学准教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

生殖ツーリズムについて情報交換。Majumdar 氏にはインドの代理出産について情報提供をしてもらい、日本側からは、日本のカップルが代理出産や卵子提供を求めて海外に渡る生殖ツーリズムについての情報を提供した。（本報告書 24 頁参照）

Jean Encinas Franco（フィリピン大学ディリマン校准教授）

【担当】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

フィリピン大学は 1908 年に設置されたフィリピンを代表する国立大学で、その中の最大キャンパスであるディリマン校は 1985 年に設立。政治学部 Jean Encinas Franco 准教授と研究会議実施。（本報告書 33 頁参照）

Karin Hammarberg（モナシュ大学シニアリサーチフェロー）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出自を知る権利の対立への対処に関する研究」（研究代表：仙波）のために、研究協力してもらった。オーストラリアのヴィクトリア州で 2017 年 3 月から施行されている *Assisted Reproductive Treatment Amendment Act 2016* (Vic) についての調査支援、および、法制定に向けた準備の中で問題になったことや法の施行後に起こっている出来事などの情報提供を受ける。（本報告書 26 頁参照）

Deborah Dempsey（スウィンバーン工科大学准教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出自を知る権利の対立への対処に関する研究」（研究代表：仙波）のために、研究協力してもらった。オーストラリアのヴィクトリア州で 2017 年 3 月から施行されている *Assisted Reproductive Treatment Amendment Act 2016* (Vic) の施行に至るまでの歴史的経緯について情報提供を受ける。（本報告書 26 頁参照）

Khanis Suvianita（スラバヤ大学非常勤講師）

【担当】平野恵子（IGS 研究協力員）

【研究交流の概要】

科学研究費・基盤研究 C「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」（研究代表者：中谷潤子、大阪産業大学）における現地共同調査。（本報告書 37 頁参照）

Anis Hidayah (Migrant CARE 移民研究センター長)、Wahyu Susilo (Migrant CARE 代表)

【担当】平野恵子 (IGS 研究協力員)

【研究交流の概要】

移住労働者送出し法制度改正および日本への技能実習生送出しに関し、意見交換をおこなった。科学研究費・基盤研究 C「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」(研究代表者・平野)の研究助成による。(本報告書 36 頁参照)

Anne Brunon-Ernst (パリ第 2 パンテオン・アサス大学教授)

【担当】板井広明 (IGS 特任講師)

【研究交流の概要】

パリ政治学院「ナッジ・プロジェクト」責任者の一人であるアン・ブルノン教授との「ナッジ」に関する共同研究について、オンラインミーティングなどを行なっている。

Elizabeth Evans (ロンドン大学教授)、Kimberly Cowell-Meyers (アメリカ大学助教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Politics & Gender (アメリカ政治学会学会誌) の特集「Women's Party (女性政党)」の共同責任編集担当 (2019 年発行予定)。

King's College London, Global Institute for Women's Leadership の web サイトにて、ブログを共著。

Linda Hasunuma (ブリッジポート大学助教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

英文学術雑誌 *Journal of Women, Politics and Policy* (2019) に共著論文「#MeToo in Japan and South Korea: #WeToo, #WithYou,」執筆。2019 年度 JAWS (ボストン) の共同ファシリテーター。IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」のパネリストとして論文発表。(本報告書 65 頁参照)

Mary M. McCarthy (ドライク大学准教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」のパネリストとして論文発表。(本報告書 65 頁参照)

Denise M. Horn (シモンズ大学准教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」のパネリストとして研究発表。(本報告書 65 頁参照)。

Melissa Deckman (ワシントンカレッジ教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

第 9 回 JAWS (ボストン開催) にて共同でファシリテーター担当。(本報告書 104～106 頁参照)。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

ノルウェー最大の大学 NTNU に属する、1989 年設立の研究センター。人間関係や文化とジェンダーの関連性およびそれらの変容に着眼した、学際的なジェンダー研究に取り組んでいる。ノルウェー国内のジェンダー研究の中心拠点でもあり、国際的なネットワーク構築も積極的に進めている。

【担当】石井クンツ昌子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、吉原公美（IGS 特任 RF）、ほか

【共同研究・研究交流の概要】

2018 年 11 月 27 日（火）NTNU 研究者本学来訪、研究会開催。2019 年 1 月 12 日（土）開催国際シンポジウムにアン・ボルグ副学長招聘。ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART 採択。2019 年度より 3 年間、同助成金による共同プロジェクトを実施する。

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

1959 年創立で 60 以上の地域から 1700 人以上の学生が学んでいる理工系を中心とした全寮制の大学。学内公用語は英語で、当該専攻はジェンダー視点から開発の問題を研究している。

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、板井広明（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム、「AIT ワークショップ」を実施し（本報告書 107～113 頁参照）、国際的な視点を持った若手研究者の育成およびアジア各国出身学生との研究交流を進めている。

韓国ジェンダー政治研究所

韓国ジェンダー政治研究所は 1999 年に設立された NPO。政治分野におけるジェンダーギャップを解消するために世論喚起、研究、ロビー活動を行っている当該分野で代表的な民間研究所。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年～2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表的性差についての公式・非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。（本報告書 20 頁参照）

ソウル大学日本研究所

日本研究の活性化と日韓相互理解の増進を目標として 2004 年に設立。日本関連資料の収集、国際学術会議、学術活動事業、情報ネットワーク構築、次世代日本専門家の養成等の事業を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員。ならびに共同研究プロジェクト『思想と文学』共同研究員を務める。

ソウル大学国際問題研究所

ソウル大学政治外交学部に設立され、外交問題や国際政治の研究に取り組む研究所。研究活動の一部として Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」共同研究員。東アジアの国際関係理論におけるフェミニスト国際政治、日本研究を担当。

Scalabrini Migration Center

フィリピン・マニラにある、国際移動、特にアジア太平洋地域の国際移動に関する学際的な研究を促進するために 1987 年に開設された民間の研究所。移民研究に関する書籍や雑誌の発行、研修プログラムの企画、移民の権利擁護のための活動、学術機関や市民社会、国際機関や政府とのネットワーク構築などを行っている。

【担当】大野聖良（IGS 特任リサーチフェロー）

【共同研究・研究交流の概要】

科研基盤 B 「日比間の人の移動における支援組織の役割～移住女性と JFC の経験に着目して」（代表：小ヶ谷千穂）の調査および研究会議。（本報告書 33 頁参照）

インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター

インドネシア国内で初めて女性学・ジェンダー研究に関する大学院を設置。研究者のみならず、政府関係者（中央、地方）、社会運動家、起業家等、多くの人材を輩出している。本研究センターは、大学院所属ジェンダー研究を専門とする教員より構成される。

【担当】平野恵子（IGS 研究協力員）、Sulistiyowati Irianto（インドネシア大学教授、センター員）

Mia Siscawati（インドネシア大学教員、センター長）、Shelly Adelina（インドネシア大学教員、センター員）、Ani Widayani Soetjipto（インドネシア大学教員、センター員）

【研究交流の概要】

2008 年以降、定期的に研究交流を実施している。今年度は特に、①移住労働者送出し法制度の変更、②2019 年 4 月実施予定の大統領選挙、総選挙、地方自治体首長選挙、統一地方選挙における女性運動の関わりについて、情報提供を受けた。

【国内外関連研究会】

○政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Gender, Diversity and Representation（GDRep））

『政党行動と政治制度』セミナー・シリーズ」実施

〈コーディネーター〉申琪榮（IGS 准教授）

〈メンバー〉三浦まり（上智大学教授）、Jackie Steele（東京大学准教授）

○日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）

○「East Asian International Relations Theory」研究会（申）

○国際移動とジェンダー研究会（大橋）

○現代規範理論研究会（板井）

○Transnational Commercial Surrogacy and the (Un)Making of Kin 研究会（仙波）

○国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク

ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

2) 国際共同研究プロジェクト

ジェンダー研究所所属メンバーは、各国の研究者たちと国際共同研究プロジェクトを推進している。

プロジェクトタイトル

東アジアにおけるジェンダーと政治

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
三浦まり	上智大学
Jackie Steele	東京大学
Chang-ling Huang	国立台湾大学
Wan-ying Yang	台湾政治大学

研究プロジェクト概要

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一樣ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2018 年は成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れたほか、新たな科研が採択され、日本の国会議員へのアンケート調査の2度目行う準備を進めた。（本報告書 18 頁参照）

プロジェクトタイトル

議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析 韓国・日本・台湾比較分析

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
【研究分担者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所

研究プロジェクト概要

2016 年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクト（18 頁参照）の韓国調査を実施。2018 年は成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れた。（本報告書 20 頁参照）

プロジェクトタイトル

Politics & Gender 共同編集

メンバー

メンバー所属研究機関

【共同責任編集者】

申琪榮

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

Elizabeth Evans

University of London

Kimberly Cowell-Meyers

American University

研究プロジェクト概要

Politics & Gender（アメリカ政治学会学会誌）の「Women's Party(女性政党)」特集を企画し、アメリカ、イギリス、スウェーデンの研究者らと日本を含む5カ国における女性政党に関する事例研究を紹介（2019年発行予定）。

プロジェクトタイトル

科学研究費・基盤研究 C「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」

メンバー

メンバー所属研究機関

【研究代表者】中谷潤子

大阪産業大学

【研究分担者】平野恵子

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

北村由美

京都大学

Khanis Suvianita

スラバヤ大学

研究プロジェクト概要

本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。2017年度～2019年度。最終年度である次年度は、国際学会での共同報告および調査報告書の発行を予定している。

プロジェクトタイトル

Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)

メンバー

メンバー所属研究機関

【研究代表者】石井クンツ昌子

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

【研究分担者】

申琪榮／大橋史恵／仙波由加里

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

小玉亮子

お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系/ジェンダー研究所

佐野潤子

お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所

松田デレク

お茶の水女子大学国際教育センター

NTNU 研究者

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

研究プロジェクト概要

2018年12月、お茶の水女子大学ジェンダー研究所とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターが共同申請した、ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金（INTPART）の採択が決定した。プロジェクト名は「Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)」である。（IGSでは「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」または「INTPART プロジェクト」の呼称を使用する予定。）。2019～2021年度の3年間に渡り、共同研究および、互いの大学に滞在しての在外研修や、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催といった活動を進め、最終的には事業成果を書籍として刊行することを目標としている。

3) JAWS・AIT

ジェンダー研究所は次世代ジェンダー研究者を養成するための持続的な国際研究交流ネットワークの形成にも取り組んできた。その代表的な活動が「日本—アメリカ女性政治学者シンポジウム」(Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS)と「AIT ワークショップ」である。

JAWS は、政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが、日本とアメリカで交互に集まって研究交流を行うユニークな研究ネットワークである。参加者は、互いの研究交流はもちろん、若手研究者に参加を促し国際的な視点を身につけてもらおうと共に、政治学分野でマイノリティーである若手女性研究者にメンタリングを行う。ジェンダー研究所は JAWS の活動の拠点として日本で開催される際の研究集会、国際シンポジウム開催、成果発信に勤めている。

AIT ワークショップはお茶大の大学院前期課程「ジェンダー社会科学専攻」の院生とタイのアジア工科大学院大学「ジェンダーと開発」専攻の院生達がタイと日本でフィールドワークを実施しながら学ぶ合教育プログラムである。ジェンダー研究所は本プログラムを立ち上げた主体でもあり、現在まで派遣および受け入れの運営主体として若手研究者の国際交流に勤めている。

▶ JAWS

■概要と歴史変遷

JAWS の歴史は 2000 年の夏に遡る。2000 年にアメリカ大学(American University)のカレン・オコナー (Karen O'Connor) 教授が、同大学に「女性と政治研究所」(The Women and Politics Institute)を開設したことを記念して「女性と政治に関する比較政治学」ワークショップを主催したことがその始まりである。このワークショップに、アメリカ政治学会と日米友好基金 (The Japan-US Friendship Commission) の支援を得て、日本から 5 名の研究者が招かれ、同じく招かれた 7 名のアメリカの研究者と三日間にわたって研究交流が行われた。

当時日本の政治学の分野では女性政治学者がとりわけ少数であっただけでなく、ジェンダー視点に基づいた研究は、政治学研究としてほとんど関心を持たれていなかった。これがさらに若手女性研究者をディスカレッジすることになり、女性と政治分野の研究が進まない原因となっていた。そんな中で始まったアメリカ研究者との交流は、日本の研究者にとって国際的な研究動向に触れることに加え、日本で女性研究者が政治学を研究するときにつくられる様々な壁について議論する場を提供した。女性研究者の地位向上や女性研究者が行っている研究への評価という問題は、かつてのアメリカの女性研究者らにとっても共通の課題であった。

JAWS を始めたアメリカの女性研究者ら (M. Margaret Conway, Karen O'Connor and Marian Palley)は、そのような女性研究者の課題に取り組んできた「女性と政治」研究のパイオニアであった。彼女らは同分野の女性研究者を励ましてサポートするだけでなく、自ら質の高い論文を政治学ジャーナルに発表することで「女性と政治」研究を正統性のある政治学の研究として位置付けることに貢献したのである。JAWS を通じての交流は、アメリカの第一世代女性研究者らの経験を日本の研究者、アメリカの若手研究者たちが共有することができ大きな励ましを与えた。例えば、2000 年の初の JAWS ワークショップの参加者たちは、後にアメリカ政治学会の実行委員長 Rob Hauck の協力を得て学会誌 PS: Political Science & Politics の 2001 年 6 月号に論文を掲載した。この掲載をきっかけに JAWS の日本参加者らは日

本の政治学会でも注目されることになり、彼女らの研究も認められるようになったと回顧する。岩本美砂子（三重大大学）、大海徳子（お茶の水女子大学）は福岡市で開催された 2006 年世界政治学会（IPSA）の準備委員も務めた。

このように JAWS は、日本の研究者たちにアメリカの女性研究者との交流による研究やキャリアの発展、アメリカ政治学会で研究発表、長期にわたってのメンタリングの機会を与えてくれた。アメリカの研究者にとっても、日本で研究発表を行う機会、日本の女性研究者とのネットワーク形成、若手研究者のキャリア開発へと繋がった。歴代 JAWS に参加した日米の女性研究者らは互いの社会の相違点に気付きながらもそれぞれの場で女性研究者が直面する課題に取り組み、国際的な視点で研究を進めていく貴重な経験を得たのである。

JAWS は 2000 年から現在まで日米友好基金等の支援を得て 9 回研究集会を実施した。その概要を簡単に以下に振り返る。

第 2 回：パエリ（Marian Palley）教授（University of Delaware）が 2001 年サンフランシスコで開かれたアメリカ政治学会で「Women in Japan and the US」をテーマに企画し、12 名が参加した。

第 3 回：2002 年に日本で開催され、アメリカから 3 名が参加した。三重大大学、お茶の水女子大学のジェンダー研究センターで研究集会を開催した他、女性議員、地方議員、アクティビスト達に面会した。

第 4 回：2003 年、University of Delaware とアメリカ政治学会（フィラデルフィア市）で開催され、新しい若手研究者が日本から 3 名、アメリカから 2 名が加わった。この時の成果として、2004 年 1 月号の PS:Political Science & Politics に論文要約が掲載された。フルペーパーはアメリカ政治学会の HP に Special E-Symposium に紹介された。

第 5 回：2007 年に Julie Dolan 准教授（Macalester College）と APSA（アメリカ政治学会）の Bahram Rajaee の企画によって開かれた。APSA（シカゴ市）では「女性と外交」を題したパネルを構成した他、Macalester College（ミネソタ州セイントポール市）で研究集会が開かれた。14 名の日米女性研究者が参加した。

第 6 回：2009 年、再び日本で開かれアメリカから 6 名の研究者が来日した。アメリカ大統領選挙に挑んだヒラリー・クリントンとサラ・ペイリンに関する研究、アメリカの少数政党における女性の役割、下院議員のスピーチ分析、医療政策と女性など最新の研究を報告した。日本の参加者も女性と地方議会、投票行動、女性議員のリクルートメント、女性国会議員に関する研究を発表した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センターは the German Institute for Japanese Studies と共に東京の研究集会を主催した。ア

メリカの研究者らは東京世田谷区の生活者ネットワークを訪問、さらに富山県で行われた母親大会でも研究発表し好評を得た。



第 8 回 JAWS（2017 年）、お茶の水女子大学での研究交流会

第7回：2010年にMelissa Deckman准教授（Washington College）とAPSAのBahram Rajaeiの企画によって再びアメリカで開催された。参加者は「Gender, Politics and Policy: Post-Elections」をテーマにWashington College（メリルランド州）とアメリカ政治学会（Washington DC）で研究報告を行った。2010年のJAWSは日米から19名が参加しそれまでの最大規模となった。



第8回 JAWS（2017年）、東京都議会訪問

第8回：時をおいて2017年に再開された（しばらく開催されなかったのは資金上の問題と第一世代の高齢化による）。JAWSの再開を兼ねてジェンダー研究所がアメリカから

Julie DolanとMelissa Deckman（Marian Palley

教授も来日予定だったが、悪天候により断念した）を招聘し、国際シンポジウム「なぜアメリカでは女性大統領が誕生しなかったのか？」を開催した。130名を超える多くの聴衆が集まり大盛況だった。国際シンポジウムのほか、東京都議会訪問、JAWSアラムナイ、ジェンダー研究所の研究員、お茶大の院生らと研究交流も行った。この時の成果は2018年の『ジェンダー研究』21号の特集「Gender and Political Leadership」に掲載された。

アメリカ政治学会における JAWS HP→<https://connect.apsanet.org/jaws/>

■JAWS 2018 年度成果

2018年 JAWS（第9回） 「ジェンダーと民主主義」 “Gender and Democracy”

（8月28日～31日、ボストン、マサチューセッツ州）

2018年度には第9回目のJAWSがアメリカ政治学会の協力を得てボストンで四日間開催された。ボストン市にあるソフォク大学のローゼンバグ東アジア研究所は、研究集会の場所とレセプションを提供してくれた。今年から第一世代のJAWSメンバーは引退した形となり、ジェンダー研究所の申瑛榮、Melissa Deckmanが引き続きファシリテーターとして参加した以外には、全員新しいメンバーが参加した。

今回はLinda Hasunuma (University of Bridgeport)と三浦まり (Sophia University)が加わり、アメリカ政治学会の国際交流担当のAndrew Stinsonのご協力を得てアメリカ政治学会、及び日本政治学会から、若手女性研究者に参加を呼びかけた。最終的に日米からそれぞれ若手研究者6名ずつ、12名を選抜した。

テーマは「ジェンダーと民主主義」(Gender and Democracy)として、4名のファシリテーターが初日にレクチャーをすることで始まった。12名の参加者は研究セッションとアメリカ政治学会パネルで、女性運動、女性の政治参画、トランスナショナルな女性連帯、リーダーシップ、政治参加のジェンダーギャップなどについて研究発表を行った。そのほかにも、キャリア形成、メディアと研究発信、Publicationなどについて議論するセッションも設けた。女性の政治参加に関する大規模な研究を支援している「Barbara Lee Foundation」にも訪問し財団の活動についてうかがった。（具体的なスケジュールは

<https://mk0apsaconnectbv6p6.kinstacdn.com/wp-content/uploads/sites/22/2019/02/2018-JAWS-detailed-schedule.pdf>）

▶ AIT

■国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」概要

開発とジェンダーの問題を海外で実践的に研究するプログラム

18 年目を迎える国際教育交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology (AIT)）とにより実施されている、国際教育交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、タイ AIT で実施されるワークショップへの本学博士前期課程院生を主とする派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、大学院生を主体とした研究交流事業をほぼ毎年実施している。

2012 年度からは、AIT ワークショッププログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れ、本年度で 17 回目を迎えた。

グローバルなフィールドでの理論的検討と実践的学習

本教育プログラム（「国際社会ジェンダー論演習」）の目的は、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査の基礎を、実践的に学習することにある。

大学院講義の事前学習（関連機関での調査）、調査して得た知見の英語によるプレゼンテーション、報告書作成という一連の調査研究の研修を通して、修士論文作成のための技能を習得する。加えて、英語によるインタビュー、プレゼンテーション、論文執筆の訓練機会にもなる。

このような充実したプログラムを通して、参加者は開発の問題をジェンダー視点から考察することの意義を皮膚感覚と理論的観点からより深く把握することができるようになる。また AIT に集まるアジア各国の院生の熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから刺激を受け、研究手法や語学のブラッシュアップへの動機づけを得る。その結果、研究者としての議論の組み立て方や調査方法、研究アプローチについて際立った効果が参加者には見られるのであり、本プログラムは比類のない教育効果をもっていると言える。

■AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development ジェンダーと開発
2002	Gender, Work and Globalization ジェンダー、労働、グローバリゼーション
2003	Women, Globalization and Home-based Work 女性、グローバリゼーション、在宅労働
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand タイにおける女性移動労働者の権利 【協定締結】
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women タイにおけるジェンダーと開発：労働者の権利と女性に対する暴力
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment ジェンダー、権利、エンパワメント
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives ジェンダー視点によるタイ・日本相互研究
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis ジェンダーと政策：タイと日本の相互分析を通して
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan ジェンダーと社会改革：タイと日本の比較分析
2011	Gender and Disaster ジェンダーと災害〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality セクシュアリティ
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution グローバル・ジャスティス：女性の健康と売春
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment 1) セクシュアリティ、2) ジェンダーと貧困、3) 教育とエンパワメント
2015	Labor, Sexuality and Empowerment 労働、セクシュアリティ、エンパワメント
2016	Labor and Association from Gender Perspective ジェンダー・パースペクティヴから見た労働と組織
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives ジェンダー視点から見たセクシュアル・マイノリティと移住労働者
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives ジェンダー・パースペクティヴから見た権力とセクシュアリティ

■履修生の卒業後の軌跡

AIT ワークショップでの経験から留学・就職そして現在まで

大類 由貴

2015 年度 AIT ワークショップ履修生

勤務先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

2015 年度に参加した AIT ワークショップは、その後 AIT へ留学する大きなきっかけとなりました。AIT ワークショップではタイをフィールドに、国際機関や NGO にインタビュー調査、AIT の授業受講と AIT の学生達と自分の研究テーマを発表しました。1 週間という短い期間でしたが、英語でのインタビュー調査やプレゼン、AIT の教授や学生との議論は、私にとって大変貴重な経験となりました。

特に、AIT の授業で同世代の学生達が活発に議論している姿や自分とは異なる問題意識を持っている点に、大きな差を感じ衝撃を受けました。それと同時に、将来開発とジェンダーの分野で働きたいと考えていた私にとって、日本の中から開発とジェンダーの問題を見ることに違和感を感じました。このことがきっかけで AIT への留学を考え始めました。AIT では、開講されている科目も幅広く、専門知識をさらに深め、自分の研究の可能性を広げていける環境が整っている点に大きな魅力を感じました。また、タイだけでなく、東南アジアや南アジア、東アジアなど様々な国籍、バックグラウンドを持つ学生達と議論し切磋琢磨することにより、多様な視点、国際的な視点や学術的な視点を身につけることができると考え、AIT への留学を決意しました。

10 ヶ月の留学では、授業を受講しつつ、研究調査プロジェクトへの参加や自分の研究の調査も実施しました。授業では、開発とジェンダーには欠かせない基礎的な論文を用いてじっくりと理論が学ぶことができただけでなく、実際にフィールドワークやグループワークで学んだ理論を実践に生かす機会がたくさんありました。この点が AIT で学ぶ特徴の 1 つだと思います。また、1 つのテーマに関して様々な国籍の学生と議論することで幅広い視点を持つことができたことや、すでに国連や NGO での勤務経験があるクラスメイトも多かったことから、彼らの豊富な経験や知識からの学びも大きかったです。授業以外では AIT の日下部先生とともに研究調査プロジェクトに携わり、タイの北部のチェンライにある山奥や東北部のシーサケットにある農村部でのインタビュー調査と報告書作成を担当しました。この調査経験が実際に自分の研究でのインタビュー調査や論文執筆に役に立ったと感じています。研究面では、AIT の卒業生が務める NGO への訪問とワークショップに参加させていただいたご縁で、実際に調査地が決定したこと、研究テーマに関する知識だけでなくテーマに関するタイでの現状についても現場レベルで知ることができ、研究の視野が広がりました。AIT での学び、経験がなければ修士論文を完成させることはできなかったと思います。

卒業後は、ジェンダーと開発はもちろん教育やアジアと関わることをできる仕事に就きたいと考え、現在の勤務先に運良く就職することができました。日々新しいことに刺激を受けると同時に自分の知識や能力不足を痛感しています。まだまだ AIT で学んだことを十分に活用できている状態ではありませんが、お茶大そして AIT を離れても自分の専門性を日々高めていく努力と専門性を活かせる機会に存分に発揮できるよう励んでいきたいです。

最後に、留学中にいつも温かく見守っていただき、親身になって相談にのってくださった AIT の日下部先生、留学中から卒業まで丁寧なご指導と明確なアドバイスでご指導していただいた申先生、いつも励まし合い支えてくれたお茶大そして AIT のクラスメイトに心より感謝申し上げます。

■ 2018 年度 AIT ワークショップ実施概要

「ジェンダー・パースペクティブから見た権力とセクシュアリティ」をテーマに実施

【概要】

2018 年度の AIT ワークショップは、「ジェンダー・パースペクティブから見た権力とセクシュアリティ」をテーマに、国内事前研修（4/11～7/25）、AIT からの参加院生 2 名の受入（7/17～7/27）、タイ AIT での研修（8/26～9/1）、研修報告会（12/5）、報告書作成というプログラムで行なわれた。

本学からの参加者は 5 名（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の 4 名と博士前期課程人間発達科学科専攻の 1 名）。国内事前研修として、大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を履修したほか、AIT 院生来日研修時には、共同での国内フィールドワークや研究報告会に参加し、研究交流を行った。タイ研修では、同時期に AIT を訪問していた名古屋外語大学の学生と合流してのフィールドワークも日程に組まれ、ユニセフの活動現場など、例年と同様に多くの機関を訪問することができた。コーディネーターとして本学ジェンダー学際研究専攻院生が関わり、フィールドワーク方法論担当講師と協力してプログラムの企画運営を担当したほか、履修生の報告会にはジェンダー研究所特任講師が参加した。

【プログラム統括】板井広明（ジェンダー研究所特任講師）

【国内事前研修担当講師】大橋史恵（武蔵大学准教授）

【コーディネーター】高橋加織（博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

【履修生】笠原 容（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）

永井萌子（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）

近藤 望（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース）

曾 宇宸（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース）

Meckhasinh Soukannha（博士前期課程人間発達科学科専攻 教育科学コース）

【AIT からの研修生】Mehbuba Jabin（修士課程）

Jiang Congcong（博士課程）



タイ LPN (LABOUR RIGHT PROMOTION NETWORK) 本部にて
設立者 Mr. Sompong Srakaew から活動内容を伺う AIT 参加者 (2018 年 8 月 30 日)

■ 2018 年度 AIT ワークショップ研修報告

国内事前研修

2018 年度の AIT ワークショップは「ジェンダー視点から見た権力とセクシュアリティ (Power and Sexuality from Gender Perspective)」をテーマに、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の 5 名が参加した。ワークショップのコーディネーターを担ったのは高橋加織 (博士後期課程ジェンダー学際専攻) である。

大学院科目での国内事前研修は 4/11 (水) ～7/25 (水) に全 15 回行なわれた、大橋史恵講師 (武蔵大学准教授) による「フィールドワーク方法論」である。資料の探し方や扱い方、細かな研究倫理の問題等をはじめ、論文における引用の仕方や文献リストの作り方、フィールドワークのプランニングや実践における注意点といった基礎的事項が講じられた。マリア・ミース『国際分業と女性—進行する主婦化』(日本経済評論社、1997 年) や Diane L. Wolf, *Feminist Dilemmas in Fieldwork*, Westview Press, 1996 などが輪読テキストとしてとりあげられた。また Fashion Revolution Week に向けて、#whomademyclothes? と SNS で問いかける実践や、Fashion Revolution Japan のイベントへの参与観察、Fashion Revolution Japan の代表を務める竹村伊央氏 (Ethical Fashion Japan) によるレクチャーも行なわれた。

研究交流研修

7/17 (火) ～7/27 (金) には、Mehbuba Jabin (修士課程) と Jiang Congcong (博士課程) の 2 名が AIT から来日して研修を行なった。IGS を含めたお茶大内の施設訪問、棚橋教授や准教授との面談、国際留学生協会 (IFSA) などの訪問、東京レインボープライドやお茶大・卒業生インタビューなどを行なった。

8/26 (日) ～9/1 (土) は本学の院生 5 名がタイにある AIT での研修にのぞんだ。タイに滞在中は、IOM Thailand Office、LPN Foundation、ILO Thailand、Empower Foundation、UNICEF、Bangkok Rainbow を訪問・調査し、AIT の授業「Gender, Enterprise and Organization」や、「お茶大—AIT ジョイント・セミナー」で研究報告などをこなした。

研修報告会

12/5 (水) 12 時 20 分～13 時 30 分には板井広明ジェンダー研究所特任講師の司会のもと、高橋加織博士課程院生・コーディネーターが参加して AIT での研修に関する参加者報告会を開いた。参加院生 5 名が各自分担箇所を報告し、その後、質疑応答を行なった。いずれの院生も、取材先の個人情報の保護や取材のまとめ方など、前期に受講した「フィールドワーク方法論」の授業で得たことが大いに役に立ったと述べており、またタイ現地の ILO やユニセフの事務所、セックスワーカー向けのエンパワー事務所などを見学し、修士論文を書く上で必要な取材をある程度行なうことで、それぞれの研究対象の問題点を明確化するのに、このワークショップは役立ったとのことだった。同世代の AIT の学生とのジョイント・セミナーでは、さまざまなアプローチや知見を得られ、かつ活発な議論が行なわれていたことが刺激的だったようである。

研修報告会での報告をもとにして、現地での調査や授業風景などの画像、現地情報などを取り入れた報告書を 2019 年 2 月に完成させた。

◇フィールドワーク方法論（全 16 回）講師：大橋史恵（武蔵大学准教授）

回	実施日	内容
1	4/11	オリエンテーション
2	4/18	Fashion Revolution （1）
3	4/25	Fashion Revolution （2）
補講	4/30	フィールドワーク
4	5/9	フィールドワークの振り返り
5	5/16	資料調査の方法（図書館での実習）
6	5/23	文献講読（1）『国際分業と女性』序文・はじめに・第1章
7	5/30	文献講読（2）『国際分業と女性』第2章・第3章
8	6/6	文献講読（3）『国際分業と女性』第4章
9	6/20	文献講読（4）『国際分業と女性』第5章・第6章
10	6/27	文献講読（5）『国際分業と女性』第7章＋ディスカッション
11	7/4	半構造化インタビュー調査の手法と準備
12	7/11	竹村伊央さん（Ethical Fashion Japan）へのインタビュー
13	7/18	AIT 院生との研究交流とディスカッション
14	7/25	文献講読（6）Feminist Dilemmas in Fieldwork, 第10章

◇AIT 生来日研修（7/17～7/27）

実施日	内容
7/17	東京到着、お茶の水女子大学訪問（グローバルリーダーシップ研究所、歴史資料館、グローバル協力センター、ジェンダー研究所）、シンポジウム「トランプ時代の女性と政治」参加（笹川平和財団）
7/18	「フィールドワーク方法論」にて、AIT 院生 2 名によるプレゼンテーション、台東区役所職員への LGBT 研修後、研修講師へのインタビュー（台東区役所）、歓迎会
7/19	外国人通訳ボランティアへの LGBT 研修、聴講後、講師インタビュー（町田市民フォーラム） 世田谷区電話相談員へのインタビュー（世田谷区男女共同参画センターらぶらす）
7/20	特定非営利活動法人 国際留学生協会（IFSA）訪問、東京レインボープライド インタビュー、お茶大・卒業生インタビュー（池袋）
7/21	ReBit 活動説明会（渋谷男女平等・ダイバーシティセンター）
7/22	フィールドワーク（浅草）、中国人留学生インタビュー（銀座）
7/23	IBM 本社訪問・インタビュー、お茶の水女子大学・中国人留学生の会インタビュー
7/24	棚橋教授との面談（文教 1, 202 号室）、石丸准教授との面談（本館 3F, 350 号室）、発達心理学コース
7/25	フィールドワーク（鎌倉）
7/26	早稲田大学 GS センター訪問、送別会
7/27	帰国

◇AIT ワークショップ履修生タイ研修日程（8/26～9/1）

Date	Time	Venue
Sunday 26 Aug 2018	18.25	Arrive at Don Muang Airport (XW 101)
	20.00	AITCC
Monday 27 Aug 2018	9.00-12.00	Prepare for presentation
	13.00 – 15.00	AIT Gender Class “Gender, Enterprise and Organization” (Optional)
	19.00 – 21.00	Welcome Party with GDS New Students
Tuesday 28 Aug 2018	9.00 -12.00	Ochanomizu – AIT joint Seminar (Room No.S101)
	13.30	Meeting at AITCC and Leaving to Ayutthaya
	14.00	Visit Ayutthaya and Dinner (joined by AIT students)
	21.00	Check in at IBIS Riverside Bangkok
Wednesday 29 Aug 2018	8.30	Meeting at the Lobby IBIS Riverside Bangkok
	9.00	IOM Thailand Office
	12.00	Lunch
	13.30	Forward Foundation
	17.00	Arrive at IBIS Riverside Bangkok
Thursday 30 Aug 2018	8.00	Meeting at the Lobby IBIS Riverside Bangkok
	9.00	LPN Foundation
	12.00	Lunch
	14.30	Empower Foundation
	17.30	Arrive at IBIS Riverside Bangkok
Friday 31 Aug 2018	8.30	Meeting at the Lobby IBIS Riverside Bangkok
	9.00	ILO Thailand
	11.00	Lunch
	13.00	UNICEF
	15.30	Bangkok Rainbow
	20.00	Arrive at IBIS Riverside Bangkok
Saturday 1 Sep 2018	9.30	One Day trip in BKK
	20.00	Leave from IBIS Riverside Bangkok
	21.00	Arrive at Don Muang Airport

4) 海外研究者フェローシップ受入

◆国際交流基金フェロー

Maura Stephens (ハワイ大学博士課程大学院生)

【受入担当】 棚橋 訓 (IGS 研究員・お茶の水女子大学教授)

【受入期間】 2017 (平成 29) 年 9 月 14 日～2018 (平成 30) 年 8 月 31 日

【研究テーマ】 日本における生理の経験に関する医療人類学的研究

2018 年度の研究成果

月経という普遍的な経験は、女性個人の日常生活にさまざまな影響を与えるだけではなく、月経をめぐる衛生用品の市場という経済的側面、月経を抱える女性たちの生活・労働環境をめぐる政治的側面、そして月経という現象を根幹において意味づける医学・医療の側面など、さまざまな社会的領域に関連する複合的な事象である。それゆえ、本研究は、日本社会を事例として、この複合的事象としての女性の月経 (すなわち日本の「生理」) の現在を、実証的なフィールドワークにおいて捉え、これを医療人類学の立場から分析することを目的とする。

2018 年度も、お茶の水女子大学の人文社会科学研究の倫理審査委員会の審査を経て、東京圏在住・通学の女子大学生への、月経を中心とした経験や知識についてのインタビュー調査を続けた。質問紙を使用しながら聞き取りを行う半構造化の個人インタビュー方式で、18 人から話をきいた。

個人インタビューに加え、生理用品製造企業や広告会社の作り出す月経のイメージについての調査を行った。対象とした企業は、花王やプロクター・アンド・ギャンブルといった大企業ならびに、布ナプキンの製造・販売などを事業とする小規模企業で、合計 8 社。生理用品の開発者や従業員を対象に、メールによるアンケートか対面のインタビュー調査を行ったほか、現在の広告やデジタルアーカイブの資料収集を実施した。

また参与観察として、生理用品製造企業の様々な愛用者向けのイベントに参加した。例えば、5 月に、天然コットンとオーガニックコットンを素材とする生理用品を販売するナチュラムーンという会社の「くまこフェス」というイベントに参加した。6 月にはメード・イン・アースという布ナプキン会社の「布ナプキンフェスタ」で月経血コントロールヨガと手作り布ナプキンのワークショップに参加し、布ナプキンユーザーの談話会で話を聞いた。

最後に、個人インタビューをした 18 人のうちの 4 人の女子大学生に「生理の日記」をつけてもらった。最長 2 ヶ月間にわたり生理を巡るそのときどきの経験や思いを日記形式で自由に記載してもらった。2 ヶ月間が終了した時点で、日記のコピーをさせていただき、調査協力者を対象に、日記の内容に応じて質問内容を変える非構造化スタイルでインタビューを実施した。

■IGS における研究成果に基づいた学会発表

“Managing” Menstruation in Japan: Experiences of Pain and Discomfort Hidden in Plain Sight, University of Hawai‘i at Mānoa Department of Anthropology Colloquium Series, Anthropology Graduate Student Research Symposium, Honolulu, Hawai‘i, April 11th, 2019

Putting Up with It: Hidden Experiences of Menstruation in Japan, Association for Asian Studies Conference, Denver, Colorado, March 23rd, 2019

Dealing with It: The Hidden World of Menstruation in Japan, American Anthropological Association 117th Annual Meeting, San Jose, California, November 15th, 2018

5) 国内外招聘研究者一覧

■2018 年度 海外からの招聘研究者

【アジア・オセアニア】

キム ヘスク（梨花女子大学校・韓）

国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

ソン イェラン（梨花女子大学校・韓）

国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

ズオン・キム・アイン（ベトナム女性学院・ベトナム）

国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

チョ ソンナム（梨花女子大学校・韓）

国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

【ヨーロッパ】

アンネ・ボルグ（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」（54 頁参照）

Jennifer Branlat（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

IGS 研究会「ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの研究会」（84 頁参照）

Kristine Øygardslia（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

IGS 研究会「ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの研究会」（84 頁参照）

デルフィーヌ・ガルディ（ジュネーブ大学・スイス）

特別招聘教授（92～95 頁参照）

国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）

IGS セミナー「主体、社会運動、民主主義」（69 頁参照）

エレオノール・レピナール（ローザンヌ大学・スイス）

国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）

【北米】

ジャン・バーズレイ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米）

特別招聘教授（89～91 頁参照）

国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱」（45 頁参照）

IGS セミナー「ミレニアル舞妓」（71 頁参照）

ナディア・ヤクープ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米）

国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱」（45 頁参照）

ディヤ・アブド（ギルフォード・カレッジ・米）

国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱」（45 頁参照）

サスキア・サッセン（コロンビア大学・米）

IGS セミナー「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション」（79 頁参照）

デニス・M・ホーン（シモンズ大学・米）

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）

リンダ・ハスヌマ（ブリッジポート大学・米）

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）

メアリー・M・マッカーシー（ドライク大学・米）

IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）

■2018 年度 国内招聘研究者

倉橋耕平（立命館大学）IGS セミナー「合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』」（57 頁参照）

富永京子（立命館大学）IGS セミナー「合評会：倉橋 耕平『歴史修正主義とサブカルチャー：90 年代保守言説のメディア文化』」（57 頁参照）

井上雅人（武庫川女子大学）IGS セミナー「近代日本のファッション文化を再考する」（59 頁参照）

梅垣千尋（青山学院女子短期大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）

土方直史（中央大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）

山尾忠弘（日本学術振興会特別研究員 DC／慶應義塾大学（院）、）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）

船木恵子（武蔵大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）

後藤浩子（法政大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）

小沢佳史（九州産業大学）IGS セミナー「ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考」（61 頁参照）

堀芳枝（獨協大学）IGS セミナー「フェミニスト視点からのグローバル化とディスロケーション」（79 頁参照）

日比野由利（金沢大学）IGS セミナー「代理出産をめぐる世界の現状」（63 頁参照）

徐阿貴（福岡女子大学）IGS セミナー「地政学、安全保障、女性の身体」（65 頁参照）

小門穂（大阪大学）IGS セミナー「フランスにおける LGBT と生殖医療、および性別の表記変更」（67 頁参照）

三浦まり（上智大学）国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）

村上彩佳（日本学術振興会特別研究員 PD／上智大学）国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか」（48 頁参照）

森村敏己（一橋大学）IGS セミナー「フランス啓蒙の女性論」（73 頁参照）

嶽本新奈（日本学術振興会特別研究員 PD／明治学院大学）IGS セミナー「近代日本の女性の移動と再生産」（75 頁参照）

鶴田幸恵（千葉大学）IGS セミナー「性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」か」（77 頁参照）